

島のむんがたり

発掘調査では、遺跡から発見されたものを土器や陶磁器、石器などに分け、さらに、いつ、どこで作られたものかを細かく分けていきます。では、どのようにして作られた時期や場所を特定していくのでしょうか。

破片から年代や作られた場所がなぜ分かるのか

まず、土器や陶磁器などは、模様や形の変化が分かりやすく、発見される量も多いです。そのため、共通する模様や形ごとに分け、発見された地層の新旧関係を確かめていきます。しかし、これらは、AはBより古いということは分かるものの、今から何年前ということはいくらも分かりません。

【郷土資料館 大屋 匡史】
 分かるようになります。次は「どこで作られた(とれた)」かですが、黒曜石やヒスイ、土器や須恵器(すえき)など、岩石や土器・須恵器の原料となる粘土には様々な鉱物が含まれています。それらにX線を当てて、含まれている鉱物の種類や量を調べることによって、どこで作られたかがわかります。

カムイヤキ須恵器

古くから出た土器には、日本土で古墳時代から平安時代にかけて作られていた「須恵器(すえき)」に似た種類の土器が分かります。「須恵器(すえき)または「高血赤海胆土器」と呼ばれるこれらの土器は、高血が未発見のため長い間謎につつまれていたが、1983(昭和58)年、徳之島の伊予川(かみやま)で古須恵器(こすえき)が発見され、地名から「カムイヤキ須恵器」と呼ばれるようになった。

「アジの時代」と呼ばれるこの時代、金峰町(鹿児島県日置郡)～波照間島(沖縄県)にかけて南北約1,000kmもの範囲で須恵器に似た土器(カムイヤキ須恵器)が使われていましたが、カムイヤキ古窯跡の発見により、当時の徳之島がカムイヤキの一大生産地であったことが分かりました。このことから徳之島にはトカラ・奄美・琉球諸島を交易圏としてカムイヤキを供給する大きな商業集団がいたのではないかと考えられています。



郷土資料館内展示「按司世(あじゆ)」パネルのカムイヤキ須恵器

では、どのようにして何年前のものかが分かるのか。発見された土器の地層や、土器・陶磁器に付いている木炭を分析する方法、年号が書かれた資料と一緒に発見されている場合は、その年号を特定し、年代を明らかにします。これらの作業を繰り返すことにより、土器や陶磁器の模様や形の変化が時期ごとに分かり、今から何年前のものか

これらの分析は、現地に行つて資料を採集し、観察して比べるため、膨大な時間と労力が必要となる地道な作業です。スポーツにも共通することだと思えますが、体力づくり、基礎や課題を改善するためのトレーニングを地道に行うことが、選手としての活躍に必要です。スポーツも学術研究にも本人の資質やセンスは必要ですが、本人のコツコツと積み上げたものが、後に大発見などにつながるのかもしれない。

【郷土資料館 大屋 匡史】

問 郷土資料館

☎0997-82-2908